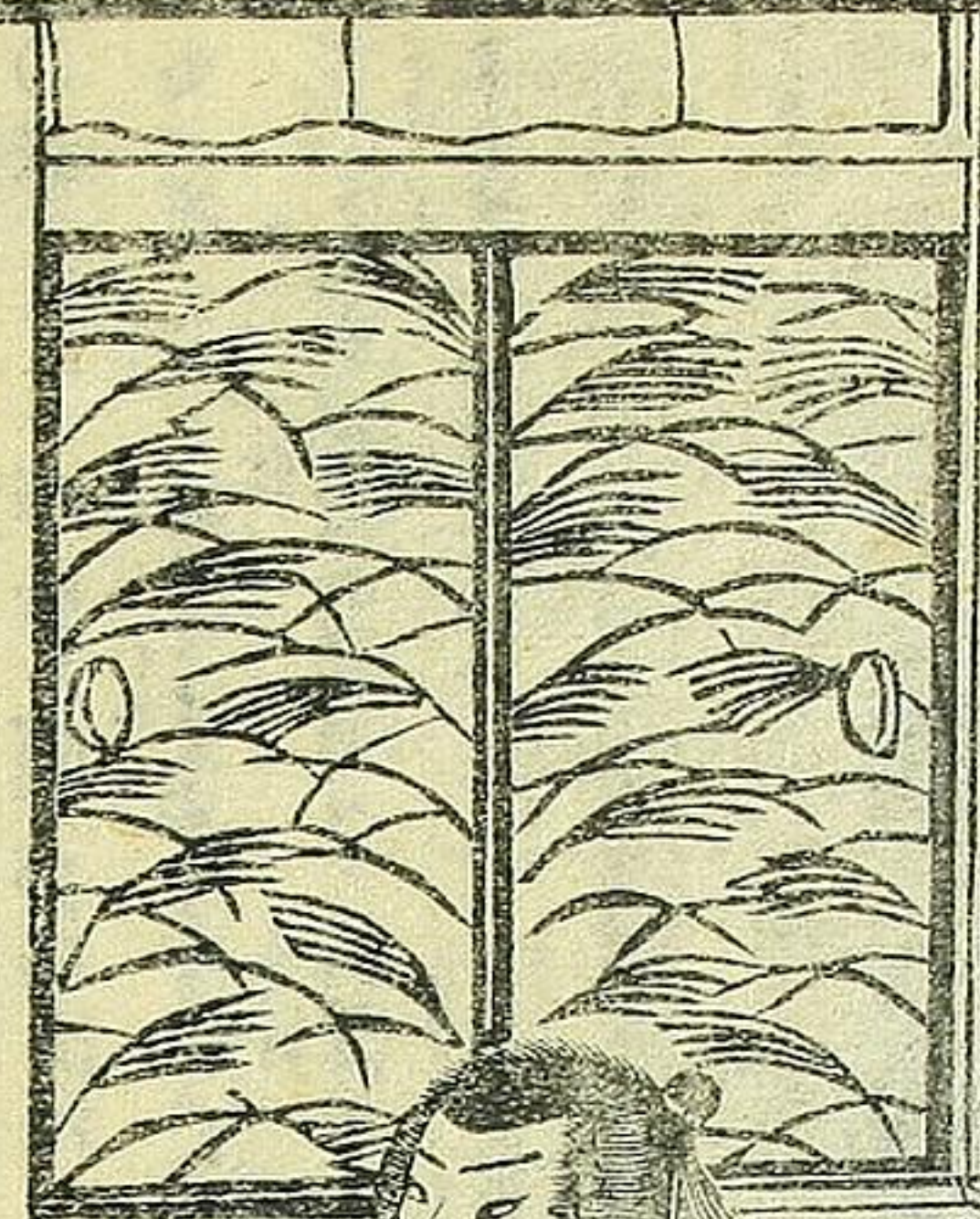
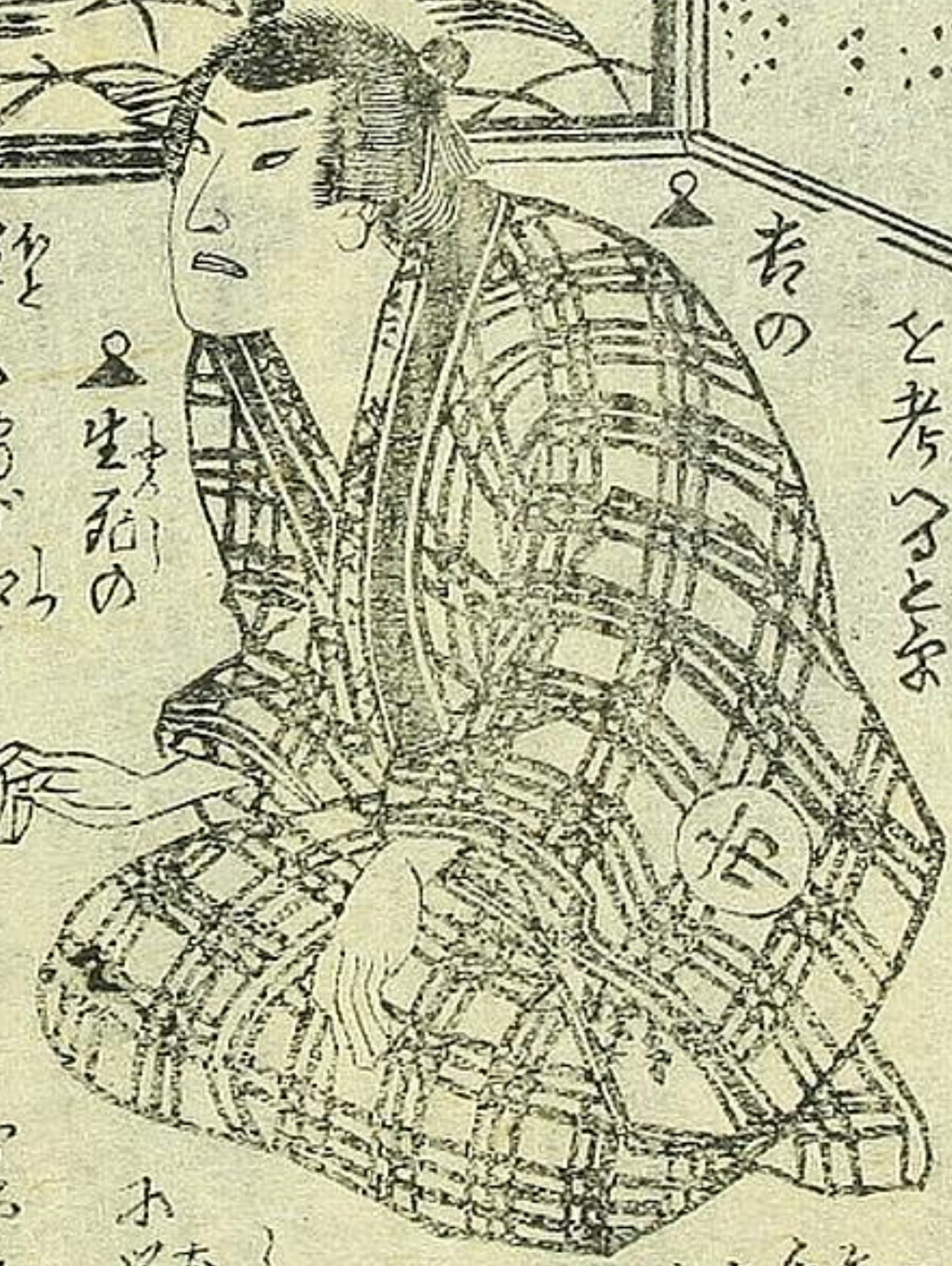


【つぎ】 彼山に於て種々とを築き世々
 不換の宝に成るべしとの事にて之を
 女帯地と二十本を借る事
 して之を束と束月納め
 此之并分此系亦何生家と持て
 其の由も之を言へ先々の

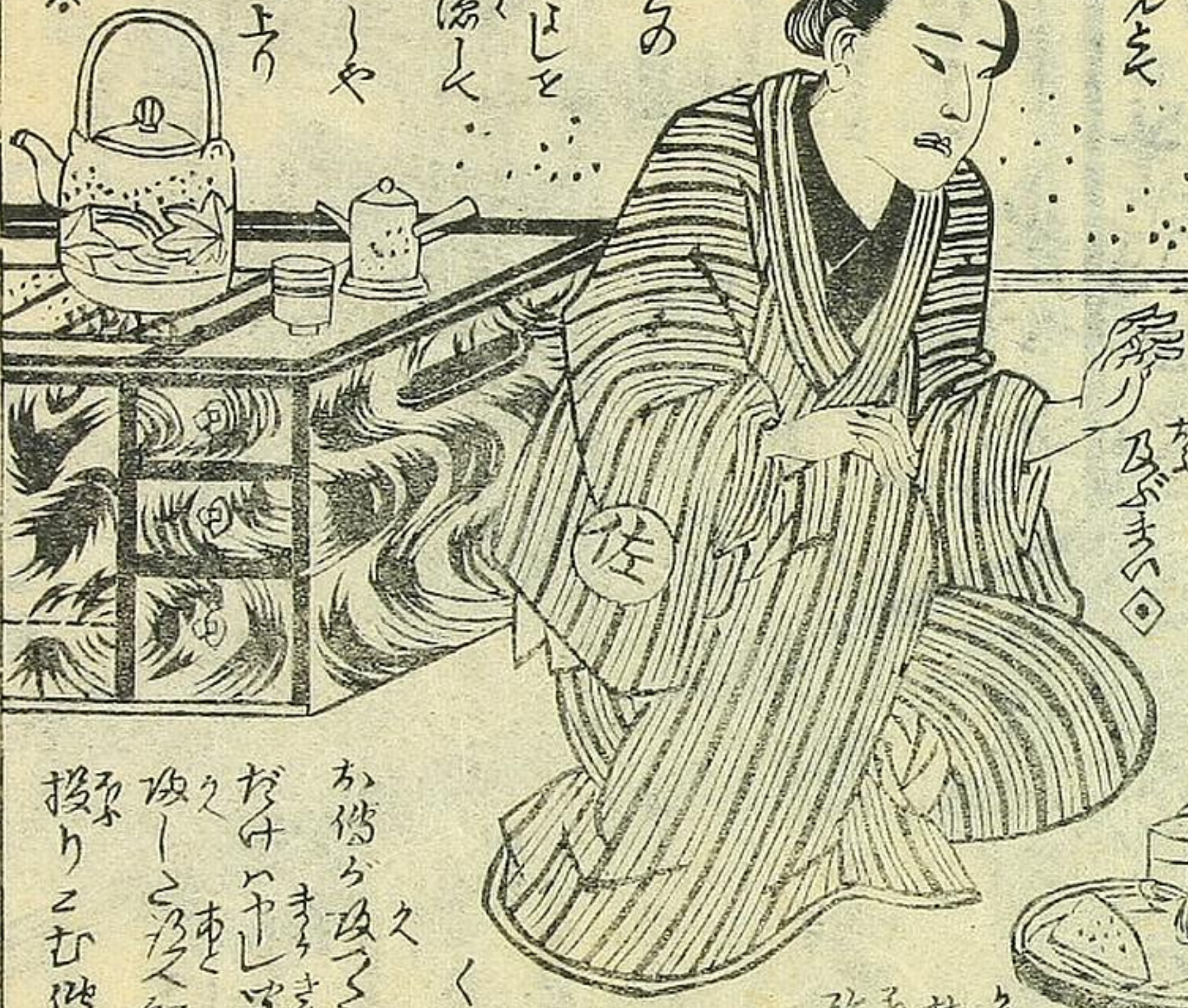


※為家小
 あこのものが
 めきくると希
 有る吐くまや
 と考へると余
 何と
 何と
 平吉の
 妻が左様
 してあること
 小覚へが
 是の
 生花の
 指へお徳が
 なる小遠ひの
 なること



① 相借や長々お借が

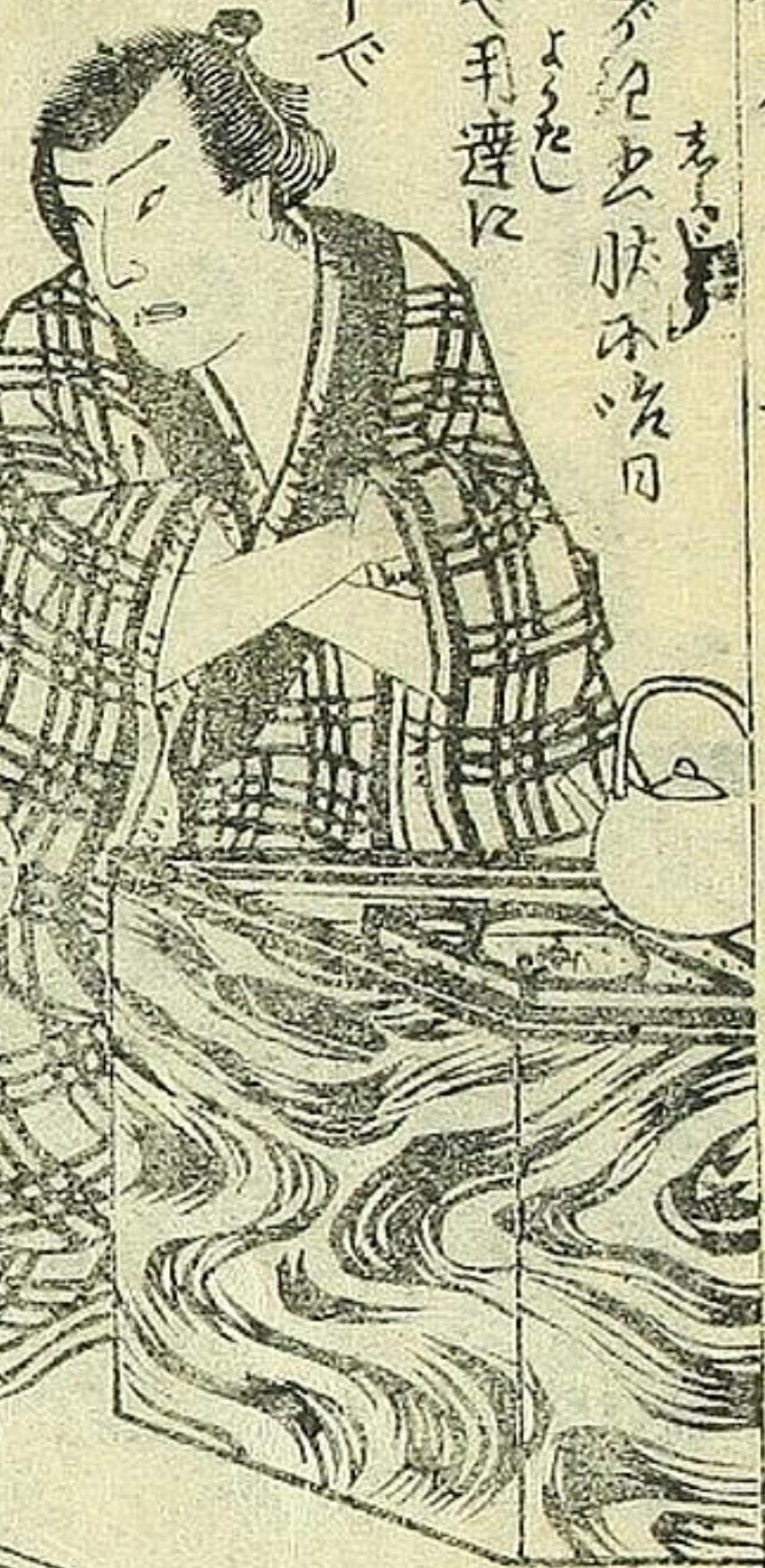
お世話の事つゝおれおせえ
 尚彼との系況もど
 吐くやある一又も
 会合の親杖も
 士族の男も
 お借といふ女お借といふ
 ありあれどお下障らぬ
 多々つと依七方お借
 ある事とて由疑が
 左様の体にて
 こも四辺とま
 元也



逃張るは
 及ぶまの
 云同き
 なること
 相合小依七
 強んど迷世
 が己れが
 たりやある
 左様とく
 く吐く後
 お借が
 だけ
 改り
 授り

つきなきはあはれな日
近下まき利達に

出之途中で



一十世

後以弁小出合ひま

一雨小る晴「の梅治方」

飛ひるあまの道下るはく

雪ふて長雨のかりたれど

市を弁由取り来し事

甘しに市を弁由
暫し考ぐ



ハ擧るる
演以弁と何

△私由係細と知ぬ事
か借不一度吐し上

鬼由南由と忘れど
演以弁の番る不

ひきあつた縁があれ
手紙あつた借とほ

てゆふれど生肉ま
倉川の人でもまると面

由をお成へくは是れに梅治
まを以是芳と移ひ



倉川の縁者

△夫等の事

や私あつてさ

し、たのとの彩

にたまきると依七

並小る所一赴

案内にのれて演以弁の

中へ入んとする以内

男の後多声何や頻りに

罵しる

とお借が

泣き

涙子に扱

うは編せ

らるる親族の若の

車以の縁由知事

に中裁へ入

由内証あ

換すと上

雨はせん

のるで

次第と

に演以弁の

と怒ら

次へ



演説は且郡と海色を互いおまの海活
 喧嘩の的さうさうと佐七が推察されぬ
 尚あつち中へ面中
 ありねるは様となり
 用も達すお二階
 せり佐七の
 態を尋ねたは
 事と市を
 ぬつとる
 けけを後
 おお借の通
 てこれと梅治の
 中女へ話をあはせしは

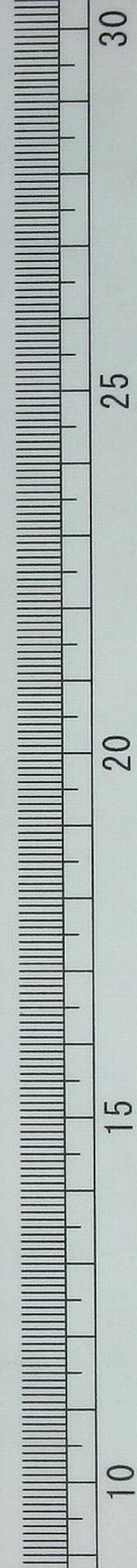
①にあらん
 どのにかな
 悪し
 くりは
 と彼不さうか
 まゆの二つの死
 佐七が後中一倉川
 似ひありとて
 氣分の男が
 再び来て
 お借分お出の
 から後事と
 業者の妻一吐
 織



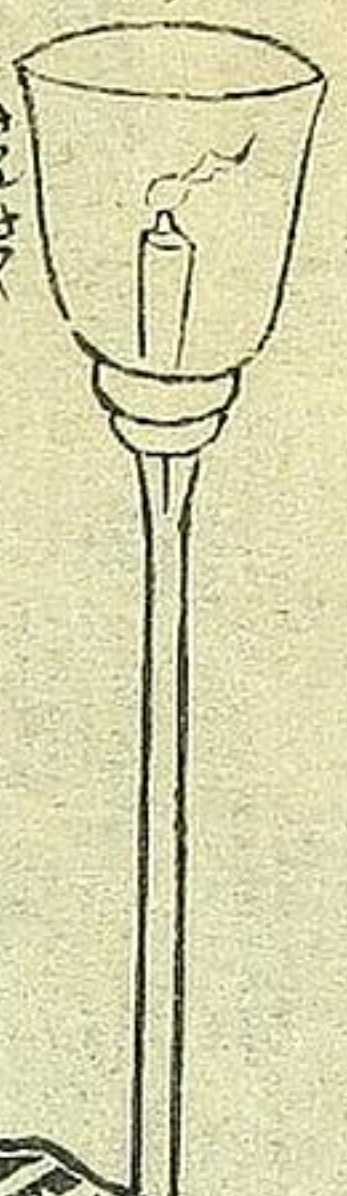
宅へ海り市とお借の
 するのり兼て女一々
 知る事あれがお借が
 梅治と喧嘩の事
 とせいでふのう
 多らねばおの
 終る
 倍ら手
 只二人一七
 何事うは痛
 中由も同もさう却つて
 二人の迷惑にふんとおのしとあへ入おに

②にあらん
 どのにかな
 悪し
 くりは
 と彼不さうか
 まゆの二つの死
 佐七が後中一倉川
 似ひありとて
 氣分の男が
 再び来て
 お借分お出の
 から後事と
 業者の妻一吐
 織

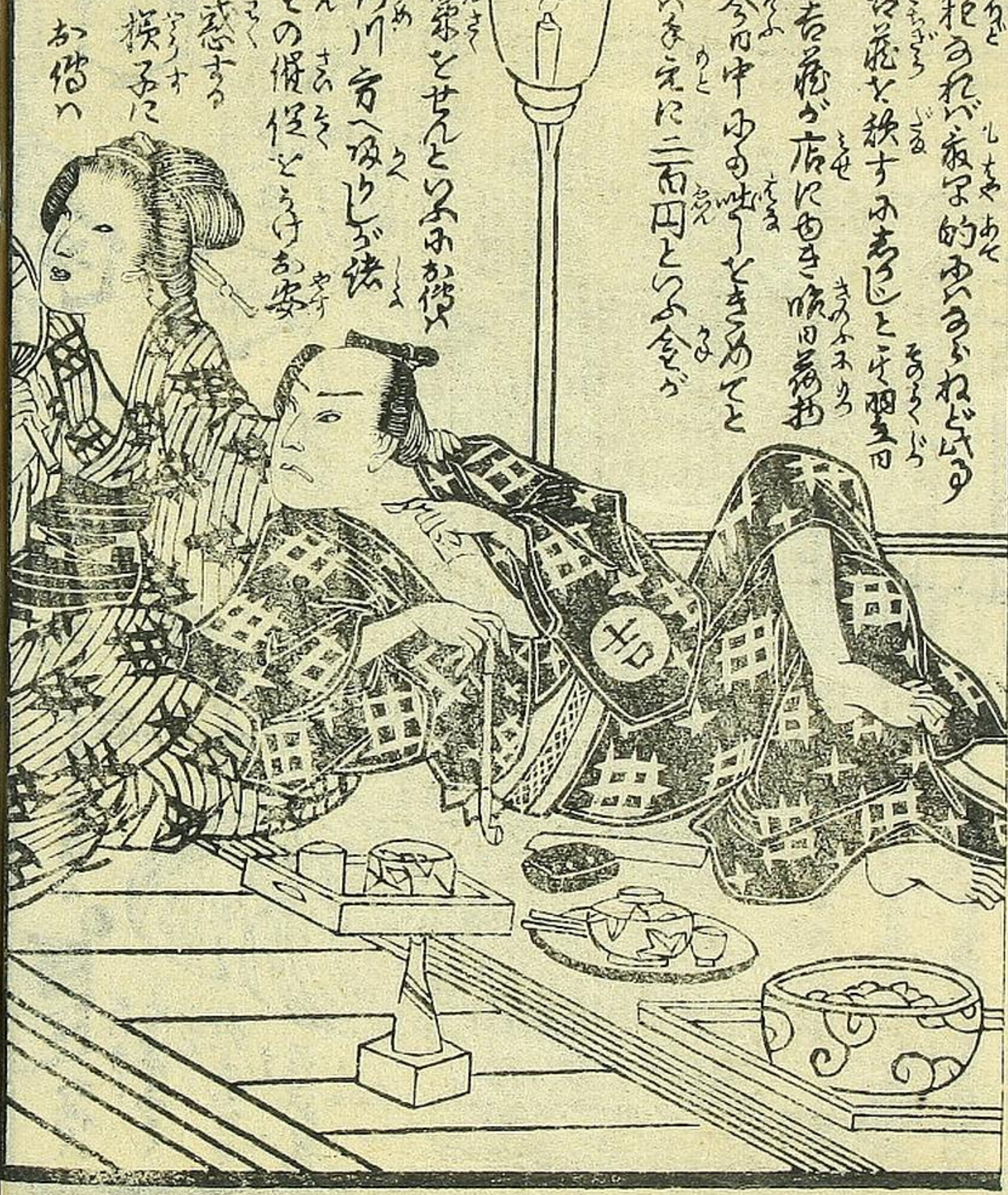




遠く程をたぐひて寂寥のあはれをねむる
 と種とて若花を秋すふあはれとて翌日
 梅木のあはれ若花が店にゆき候日あはれ
 があはれもあはれ中あはれのあはれとて
 しとあはれいふ元は二田といふあはれ

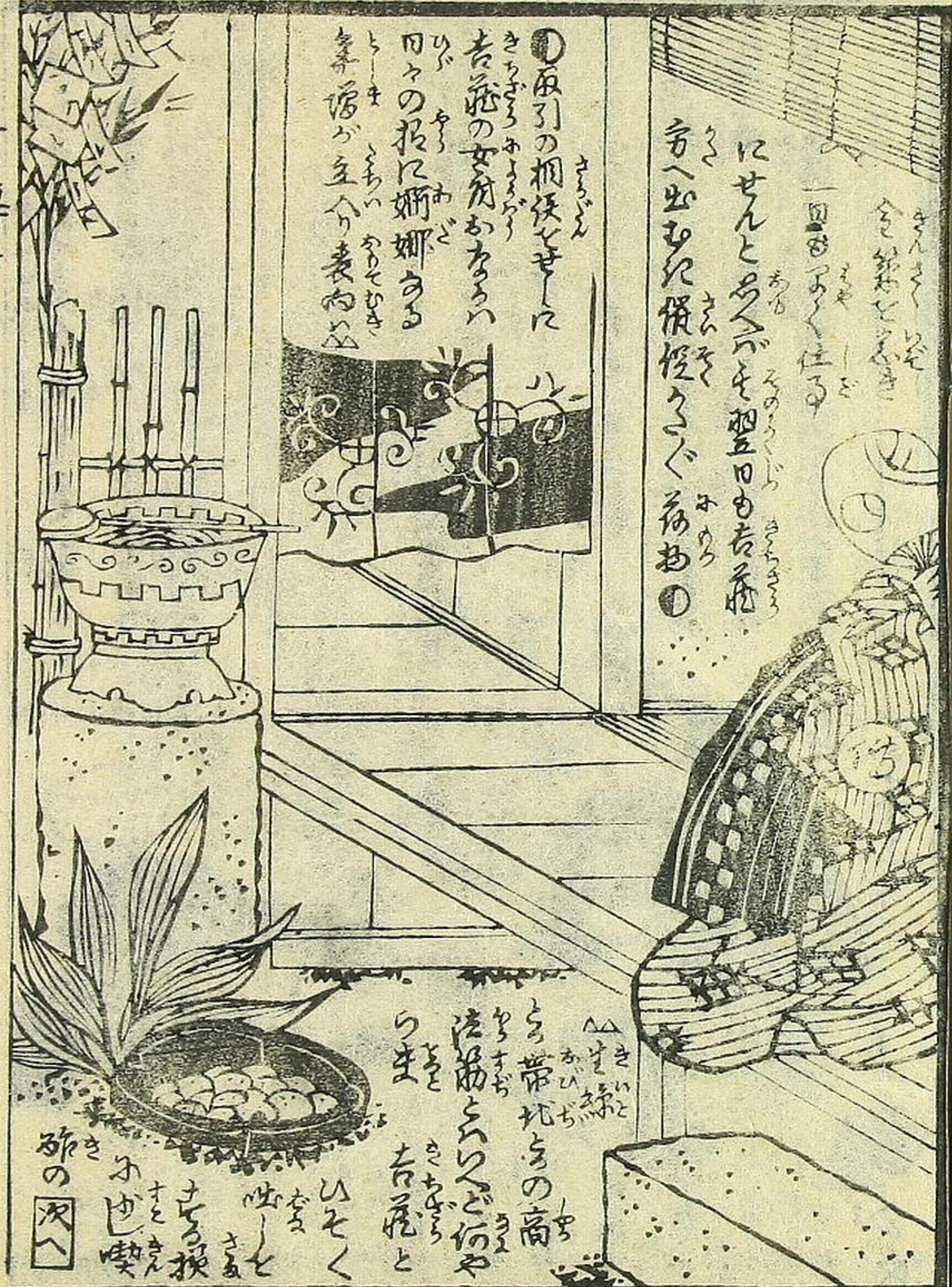


何れ二両
 月の内ふもあはれとせんとしあはれ
 是非あはれ川あはれあはれ
 方々あはれあはれのあはれとてあはれ
 もあはれとてあはれあはれ



にせんとあはれあはれあはれあはれ
 方々あはれあはれのあはれとてあはれ

○あはれの相候とせし
 若花のあはれあはれあはれ
 田々のあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれ



あはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれ

其名の高橋 東京奇聞 初編より 毒婦の小傳 追出版
 御所櫻梅松録 十五篇 仇優忠臣藏折本
 大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々
 龜地本 錦繪問屋
 編輯人 岡本勲造
 浅草區瓦町十二番地
 出版人 綱島龜吉

東京區分繪圖全

鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全

獸類一覽かるた

其名の高橋 東京奇聞 初編より 毒婦の小傳 追出版

彩色入小本數品

御所櫻梅松録 十五篇

仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊

新板双六類品々

龜地本 錦繪問屋

編輯人 岡本勲造
浅草區瓦町十二番地
出版人 綱島龜吉





櫻齋房種画

七編下



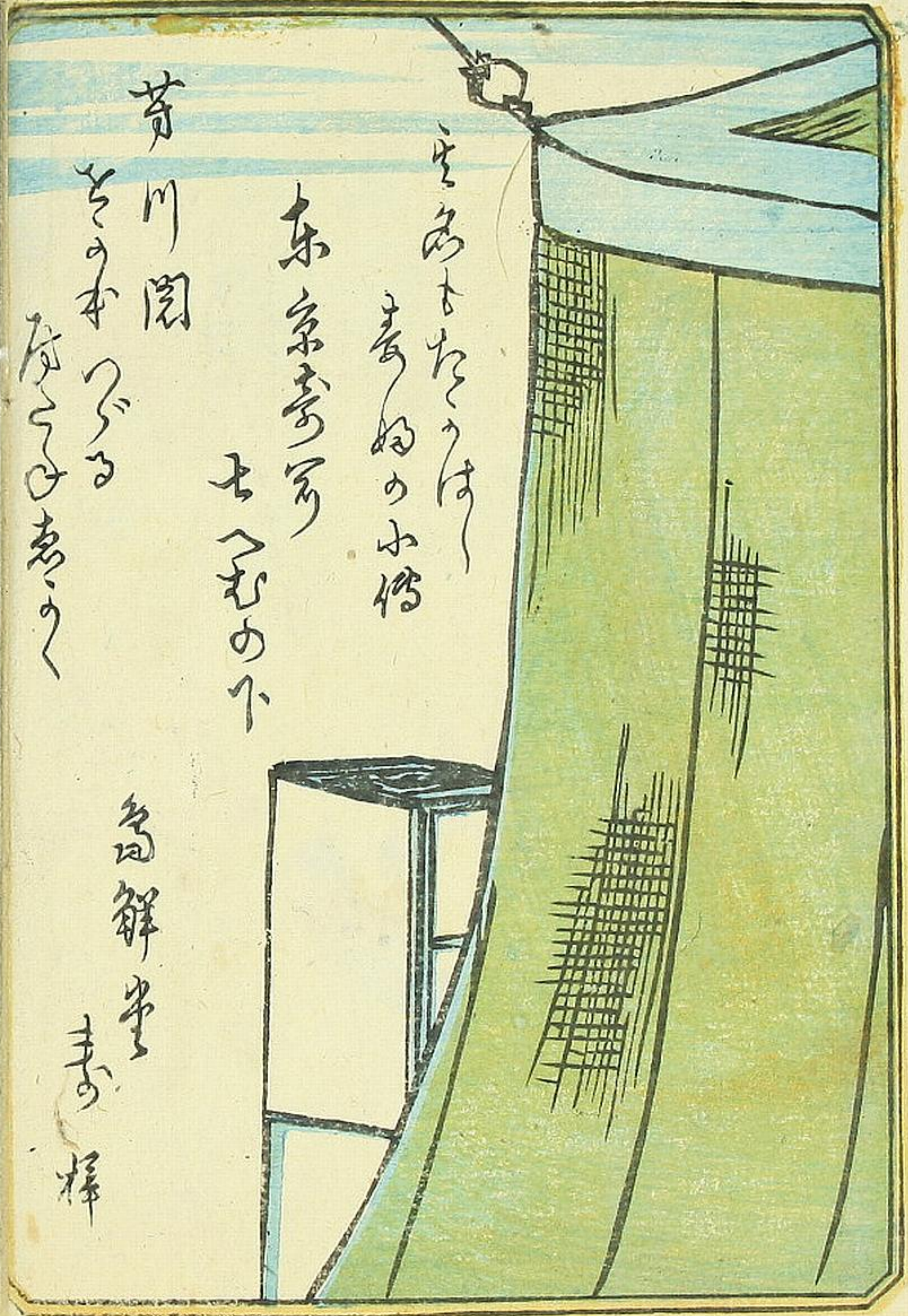
10

15

20

25

30



東系より
 七つむの
 青川園
 きの解
 まの
 様

中
 八巻の中巻(折廻り凡入の) 漢を頼まへをねる血筋をお借がをを
 方の藤巻と巻束けをささるる
 折廻りお借が既ふ之世のりよと
 酒者七お出ひおそえより好む者
 兼が女医茶の一妙へ又格別と面
 お借がを理ふ志あつて勤むる
 母の筆致おあつて手道すき通へ
 石井ののゆもあまきお借の膝か
 うらうらと私たて研てお始末に
 おん取分候へは油で煮るるお
 ちよひのまじりておむとほを死
 形お解がるお救世へはしつやリ
 比翼をさすゆゆも解るるお救世の
 面れしる杯盤を例の偶(押
 つて吊や王六の改座の中並
 て布の席の上座の居るお
 るむらり次入る 後座に
 枕の寄るるを以てお借がけられ
 たうとのお夢もあつてお借と
 赤座の今日の首尾かへす枕の
 比翼をさすゆゆも解るるお救世の

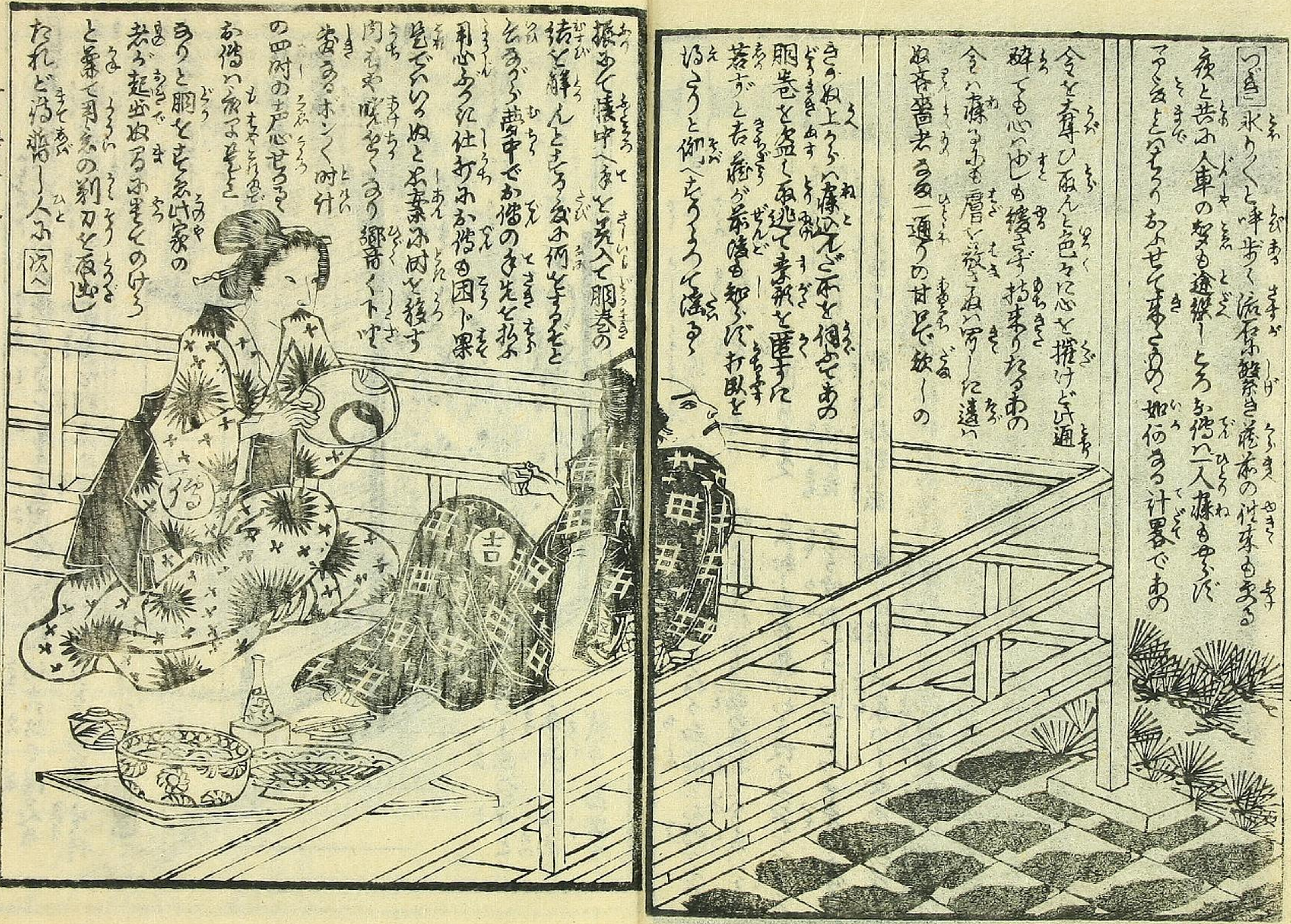
大
専
二
下

ついで 氷りくしと歩み流るる縁茶の味もあふ
 夜と昔ふ人車の聲も途絶へしとろお徳ハ人様もやん
 りとふとこのうらあふせとまのめい如何なる計畧であ

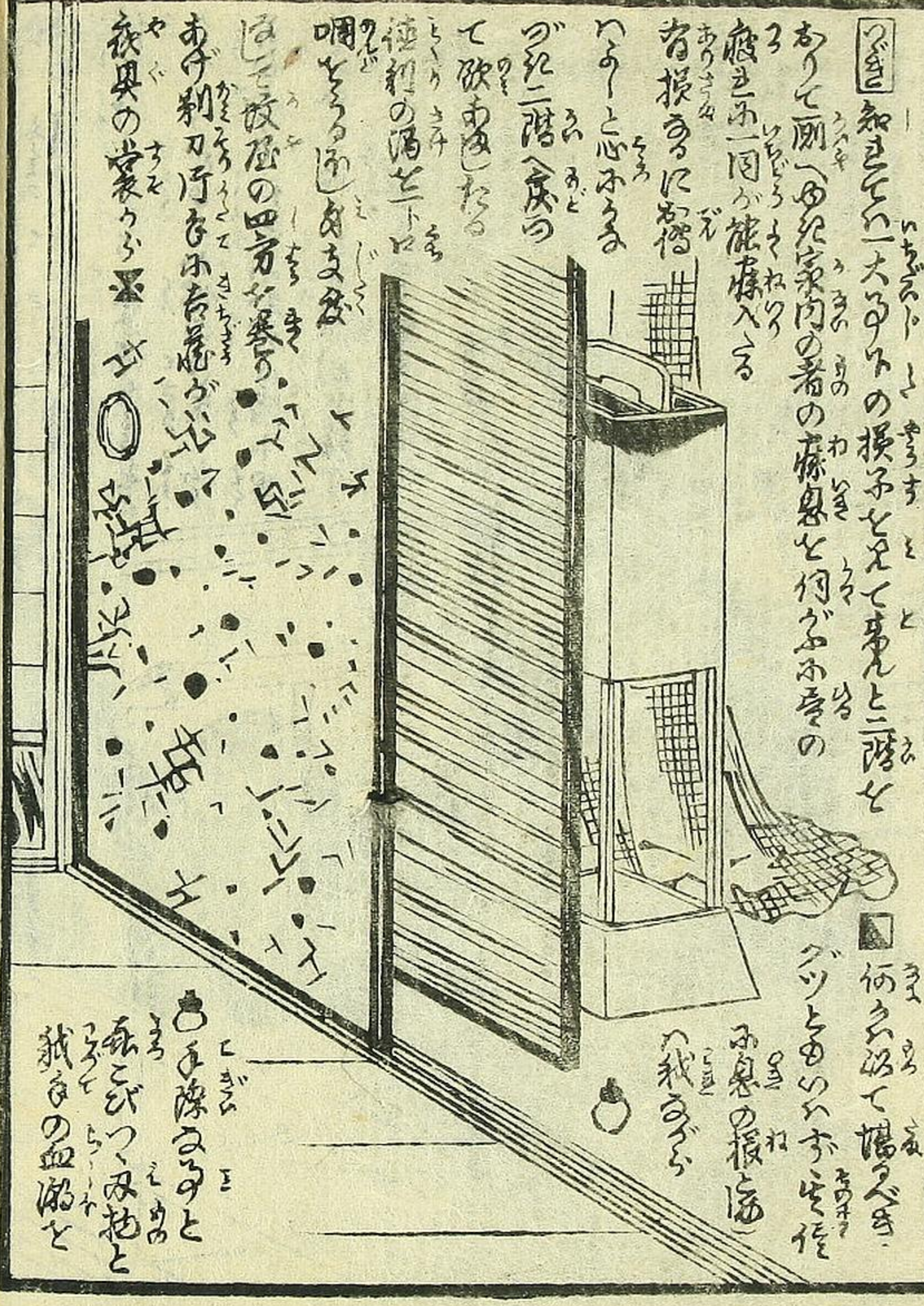
令を奪ひぬんと色々に心と推けどは通
 碎ても心のゆいも縁まぎ持まりたるもの
 今ハ藤のふも層の敷てぬい可に遠い
 ぬ茶普老るる一通りの甘き飲一の

さみぬ上うらハ藤のふも層を個々の
 朋巻を益し取逃して素紙を匿すに
 若かると若翁が茶後も知らば打眼と
 ねころと仰へるうらうらと流る

振めて懐中へを差入て朋巻の
 結と解んとするふい何とやらを
 名もつら曲中でお徳のま先を扱ふ
 用心あらは仕打ふお徳も困ト果
 是でいひぬぬとあまふ時を後す
 肉もや喉もくまり響音く下せ
 雀もるホソく時け
 の四対のま心せらる
 お徳ハあふまを
 りりと朋をまをけ家の
 若か起ぬぬるふまをのけり
 と兼て男の剣刃を返出
 たれどは普一人ふ



々々々々々



【書】 知事といふ大司馬の換子を見て事と二階を
ありて所へゆれば家内の者の藤息を何ぶおまの
藤息も一回か能藤入る

者振るにむ借
りしと心ふるま

つれ二階へ戻り
て改めたる

徳和の酒と下
咽とる所ぬま

ほそ板屋の四方を渡る
あけ利刀行なふおまの

疾風の裳うら
【書】

【書】 何ふゆて揚る時
ツとゆふおまの

おまの振る
おまの

【書】 おまの
おまの
おまの



【書】 おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

【書】 おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

おまの
おまの

つぎ 死骸の森像と仰ぐ事とて夜具と
 おもひぬる素形小飯膳のひねりと
 下して次の夜具へ思ひ出で願巻の
 中より金と改まゝに半田
 れで三百四とひひひ
 偽りゆて十餘れを
 十四たをばいあぬぬに
 へ込へ遠くと今更後まは
 事なれは如何ゆては描
 と逃れんと誓い小首とひねり
 しがオ、そはやと消かす
 行燈とをと格とて
 傍へなる矢立の



てきまゝくと
 通虫惚め死せる
 君は松之屋おれ免角
 止るる小夜いあひては家の入々
 も起出たる指子にわづは二階
 と下り何字多現侍るて救ひ
 お水とて下女お向ひ二階の
 足形の暗夜おし飲るる
 なまがうらこの事ゆゑ

●あの夜に
 寝てあつて
 下されぬ一丁
 芽所まてと
 那の合衆と
 買子作て来
 ますといふ家と
 立出で入力を

●この夜に
 出た女は及らば

十傳六

日

三

玉作小て
 大志きふ
 船家町言
 仍川言一
 室破り
 足る
 昭治九
 年八月
 廿七日
 の日
 〇お
 丸竹

二階の客も用事

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

よく藤入て指の作られど長巻

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

二階と結うりありと一人一人

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

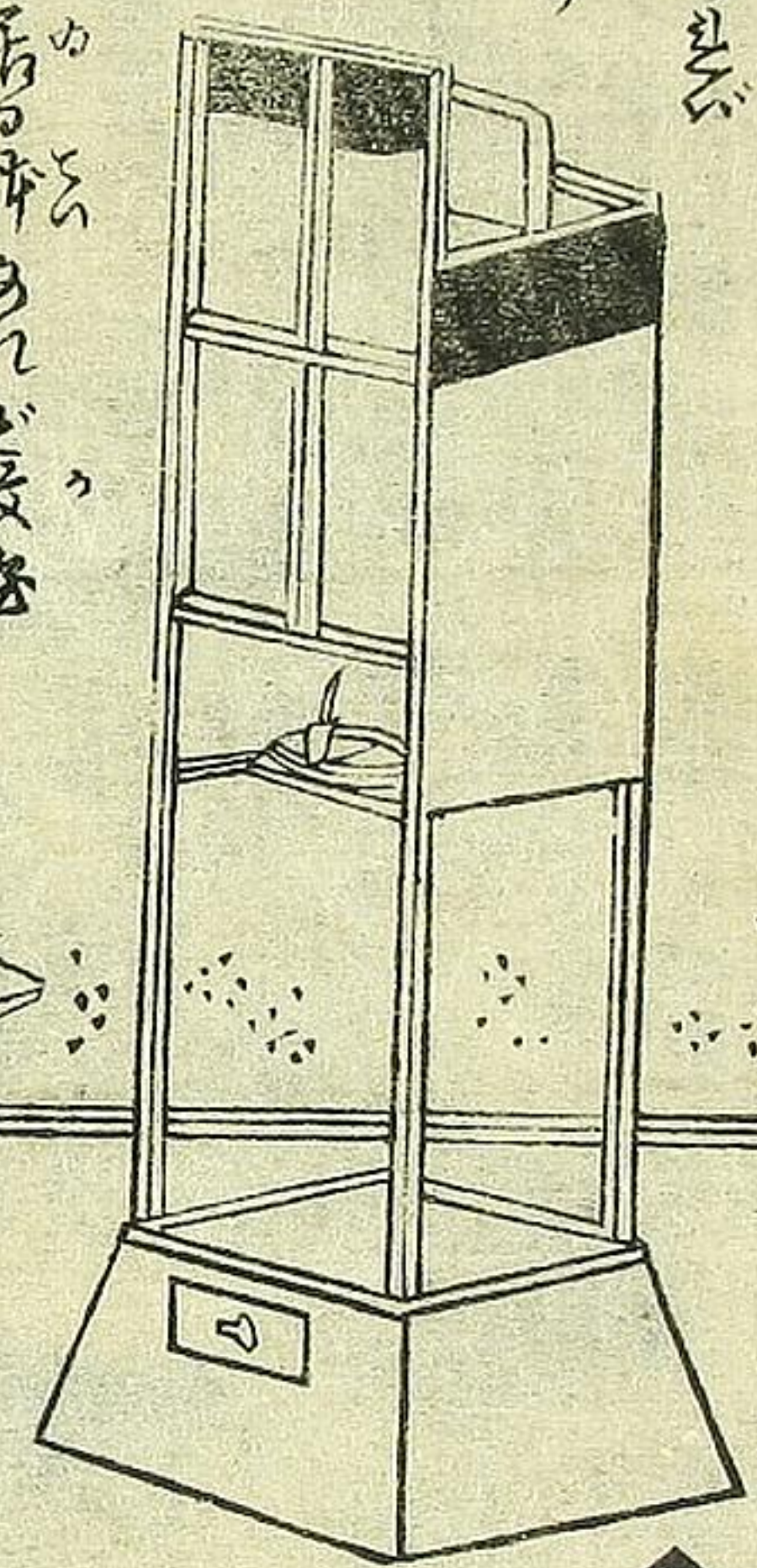
お母さんお母さん

お母さんお母さん

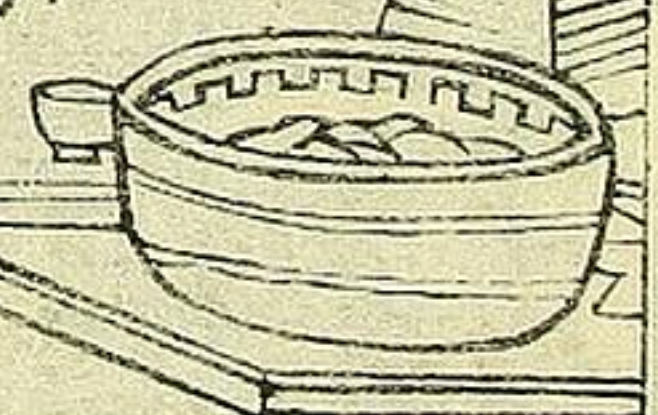
お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん



五幸



姉と

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

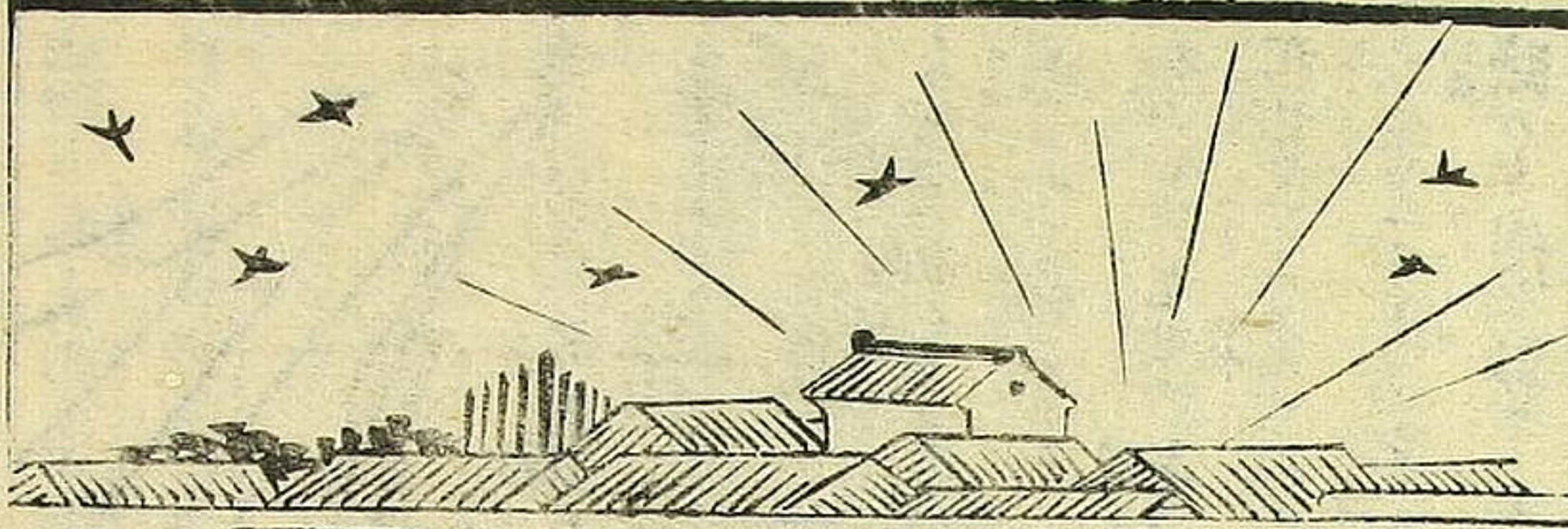
お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん

お母さんお母さん



小まづてぬきぬきと見えんが
 係き仔細のあるとまゐり
 所小由せよ早う届らる
 多のと並小教を視せ五
 方面一分署へ訴へ出
 より巡査旁が医師と
 引つて来るに九段を
 検視させし小底の
 様子に必らに別力にて
 切しそのあらはとの様
 定めぬつきし一か殺害
 したるの同者せし婦人
 小ね違ふれに送中

此に似よりの若者の
 者ありぬとあり
 小並と不審の振
 舞ありとそ為着
 小探索と遂られ
 ける教を並の行届に
 卒て逃れぬと見え
 彼人ね出とらしては女
 と思しぬ若の窮害町
 の新川安寄小同着
 するを傳とのみか似
 ようあるとの事小高
 内家小探索は匿に

川が生れの
 色たぐい
 ろく水とかけやさ
 ありに初めて
 姉の款ある
 ると都つるが



宵小女のひーまき
 付あはる宿帳に徳谷
 徳下武蔵守大目那
 谷路彩者茶後世

徳谷練への電信
 中て内山仙三助の
 宛と等
 人者
 旅



いさ 丈と徳也

麻あつて持宗方が

矢の徳のあつたと

ち置布(拘引)と置い

ち置布(拘引)と置い

あいて廿九日の暮にあらはに因お借り

犯せる罪の多しと取と強請するしかなら

大谷三郎の家の内のおとどけ物

膝より倒れさせし小若夜の婦人いひし

引合人昔の中し

三に麻あつて徳也

らんと仇打と云

い合くふにしり

あつて借り因

徳の

置布

置布

置布

置布

置布



い若まりと申ししはあつてと置布と云

若夜の仇を殺されしは合し姉の仇の心

と殺しつゝの事にはまゝと裸にお借り

裁判不(あつ)ふりふりあつて十

送りし

あつて借り

あつて借り

あつて借り

あつて借り

あつて借り

あつて借り

あつて借り

あつて借り



つぎ 毒婦の尋常の婦人に及ぶる
ある 毒あると以てその履歴の大界を死して
 明治十二年三月廿四日御届

芳川俊雄 閱
 岡本勘造 終
 櫻齋房 種畫

少年の
 戒め
 ぬん畢色と

東京區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全 獸類一覽加る方

其名も高橋 東京奇聞 初編より
毒婦の小傳 進出版
 粉色入小本數品

御所櫻梅松録 十五編 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々

龜地本問屋
龜子區吉丁七番地
編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出版人 網島龜吉

